

## ウジムチン

烏珠穆沁

Ujumchin

ウジム（山ぶどう）が実る地に遊牧したことからウジムチンとよばれるようになったという伝承をもつモンゴル系集団。15世紀、ダヤン・ハンの長子トゥルボルドの所領となった。現在、中国、内モンゴル（蒙古）自治区東・西ウジムチン旗を中心に、モンゴル国ドルノド県、スフバートル県などに一部が居住する。（内田敦之）

⇨モンゴル

図B.U.Z. 3. /張承志『モンゴル大草原遊牧誌』朝日新聞社、1986。

## ダウール

達斡爾族

Daur

広義のモンゴル系集団。中国、内モンゴル（蒙古）自治区、黒龍江省、新疆ウイグル（維吾爾）自治区などに12万1463人（1990年）が居住する。民族名称は、地域によりダゴール、ダフル、ダウールなど様々に呼ばれてきたが、1958年、内モンゴル自治区にモリンドワー（莫力達瓦）ダウール族自治旗が設立されて以後、当地での呼称「ダウール」に統一された。族源に関して契丹、タタール、モンゴルなど諸源流説があるが、中国では契丹説が支持されている。中国成立以前はモンゴルとみなされ「ダウール・モンゴル」とも呼ばれた。メルセのように1920年代、内モンゴル独立運動で活躍のちにモンゴル人の民族教育に尽力した人物も輩出している。ダウールの中には自らをモンゴルの一部と考える人々もいるが、1950年代からはじまる民族識別工作で固有の民族として認証され現在に至る。17世紀半ばまで、アムール川（黒龍江）の上・中流域で定住村をつくり、農耕・牧畜と狩猟や漁労に従事していたが、ロシアの圧迫をうけて南下し、17世紀末には完全に清朝の支配下に入った。清朝により八旗に編成され、その一部がソロン（清朝のエヴェンキに対する呼称）とともに新疆の国境地帯へ配置された。ダウールは清朝に降り定住生活に入って教育が普及したため、清朝の八旗だけでなく、日本の傀儡である満洲国でも役人として重用された歴史をもつ。

モンゴル諸語の古い特徴と共通語彙を多く有する固有の言語ダウール語をもつが、固有の文字はなく、清代には満文、民国時代以降は漢文を使用してきた。今世紀はじめからキリル文字やラテン文字を用いて文字創出の試みが続けられ、今では漢語の発音記号（併音字母）を基にした表記法が確立されて、『ダウール語漢語辞典』や『ダウール語読本』などが出版されている。ただし、他の少数民族の場合と同様、若者がダウール語を学び、使用する環境が極端に限られており、民族語ばな

れがすすんでいる。

もともと農業を副業としていたが、清代以降、農業の比率が高まり現在は農業や商業を営む者が多い。生業の変化に伴い主食が肉類から米、粉食へと変化した。副食品として、薬効もあるクンビルというヨモギも好まれる。衣服、住居は満族の影響を強くうけており伝統文化の識別が困難になっている。主たる宗教であるシャマニズムには仏教や道教など周辺民族の影響が見られる。テンゲル（天神）が広く信仰されるだけでなく、様々なバルカン（神）も祀られる。また、五穀豊穡を祈るオボ祭もおこなわれてきた。ダウールのシャマンはト占よりも病氣治療に深く関与する特徴をもつ。モンゴルと長く隣接して居住したが、一部を除いて仏教に改宗した者は少ない。

（内田敦之）

⇨モンゴル、満族

図C. Hamphrey with Onon Urgunge, *Shamans and Elders*. Oxford: Clarendon Press, 1996. / 畑中幸子「中国東北部における民族誌的複合」畑中幸子・原山煌（編）『東北アジアの歴史と社会』名古屋大学出版会、1991. / 内モンゴル自治区編輯組『達斡爾族社会歴史調査』フフホト：内蒙古人民出版社、1985。

## ダリガンガ

Dariganga

中国、内モンゴル（蒙古）自治区と国境を接するモンゴル国スフバートル県に居住するモンゴル系集団。ダリガンガはもともと部族名ではなく、ダリ山とガンガ湖をあわせてできた地名である。17世紀末以降、清朝の勅命によりモンゴル各地から家畜をあつめ、牧夫を主にハルハ、チャハルから召集しダリガンガ牧場がつくられた。ダリガンガにはホトゴイトなど西モンゴルにある氏が現在まで残っていることから推察できるように、モンゴル系諸部族が複合的に集まって形成されてきた。

（内田敦之）

⇨モンゴル、ハルハ、チャハル

図B.U.Z. 3. / L. Jamsuran, *Darigang-iin sureg khoshuu*. Ulaanbaatar: 1994.

## バルガ

巴爾虎

Barga

中国、内モンゴル・ホロンバイル（呼倫貝爾）盟シン（新）バルガ左・右両旗、ホーチン（陳）バルガ旗およびモンゴル国ザブハン、トゥブ、ドルノド、スフバートル各県に居住するモンゴル系集団。その起源を『隋書』に見える「バイエグ（拔也古）」にもとめる見解があるが、明確な根拠はない。『モンゴル秘史』には、バイカル湖西方に住む「バルグン」がブリヤートなど他の森の民とともにモンゴルに帰順したとある。元朝滅亡後、ブリヤートとともに4オイラド連合に編入された。17世紀はじめ以降、ロシアの圧迫により東方へ移動した。1688年、ハルハに帰属していたバルガはジュンガルのガル

ダンがハルハに侵入した際、ハルハとともに各地に分散した。清朝治下に入ったバルガはブトハという組織に編入され、さらに1732年、ブトハからホロンバイル八旗に再編、ホーチン（陳）・バルガとよばれた。ハルハのセチェンハン部にいたバルガは、1734年、ホロンバイルに移動、八旗に編入され、シン・バルガとなった。20世紀初頭の外モンゴル独立宣言には即座に呼応し合併を申し出て独立革命で活躍した。バルガは伝統文化や言語面でブリヤートと酷似しているが周辺諸部族の影響も見られ、移動をくり返したその長い歴史を物語っている。（内田敦之）

⇨モンゴル、ブリヤート、オイラド、ハルハ  
図B.U.Z. 3. / Tubshinnim-a, *Bargucud-un teuken irelte*. 海拉爾：内蒙古文化出版、1985. / 柳澤明「新バルガ八旗の設立について」『史学雑誌』102-3, 1993.

## ハルハ

喀爾喀

Halh, Khalkh

モンゴル国人口の大多数（79%）をしめるモンゴル系集団。15世紀、帝位についたダヤン・ハンの直轄領であった左翼（東方）のハルハ万户の一部が

16世紀はじめにハンの末子ゲレセンジェに率いられて、現在のハルハ族の祖先となった。「ハルハ」は、もともと故地を守る「楯」という意味を有していた。モンゴル語ハルハ方言は他の諸方言と異なり独立した国家語として発展してきた歴史をもつが、1940年代、旧ソ連の影響で伝統的なモンゴル文字をキリル文字表記に改めた。

（内田敦之）

⇨モンゴル

図B. U. Z. 1. / 小長谷有紀（編）『アジア読本モンゴル』河出書房新社、1997.

## 〔中国〕

蒙古族

Menggu, Mongol

モンゴルは中国文献に様々な漢字であらわれるが、元代の頃から「蒙古」という文字で統一表記されるようになった。ただ、その字面には中国固有の中華思想が反映している。モンゴル族は、内モンゴル(蒙古)自治区、新疆ウイグル自治区、遼寧、黒龍江、吉林、青海、河北、甘肅各省などのモンゴル高原およびその周辺地域だけでなく、四川、雲南、貴州省など南部にもモンゴル帝国時代の屯田兵の末裔が居住しており、これらをあわせたモンゴル人口は480万2407人(1990年)に達し、これは中国少数民族中8番目に多い。さらにモンゴル語系言語をはなす広義

のモンゴル系集団であるダウール(達斡爾)12万1463人、モンゴロルあるいはトゥー(土)19万2568人、ボウナン(保安)1万1683人、トンシャン(東郷)37万3669人、シラ・ユグル(東部裕固)12万1357人(ただし西部裕固も含む)などの民族も居住している。内モンゴル自治区には中国領内のモンゴル族の70%にあたる338万人が居住し、これはモンゴル国の人口240万より多く、モンゴル人が世界で最も多く集中する地域となっている。ただし、内モンゴル自治区全体では人口の16%を占めるにすぎず、モンゴル族はマイノリティである。清朝崩壊後、ハルハの独立宣言に呼応して独立運動をすすめた。モンゴル人民共和国成立当時は、同国との統一を目指す勢力、内モンゴル東部を占領していた日本の力を利用しようとする勢力などが様々な形で独立運動を展開したが、中国共産党主導により、中国の成立より2年早い1947年、少数民族自治区として中国内にとどまることとなった。中国には、モンゴル語の様々な方言をはなす部族集団が混住しているうえ、漢民族の移住がすすみ耕地面積が広がったため農業を営むようになった集団もあり、遊牧だけでなく多様なモンゴル世界を形成している。生業の転換、文化・言語の漢化、さらに家畜・牧地の私有化など市場経済の導入など諸要因により、遊牧を基盤とする伝統文化が大きく変容し失われつつあり、中国のモンゴル人、とりわけ都市住民の中には母語を失ってしまった者も多い。その一方で、モンゴル国をふくむ他のモンゴル地域でほとんど用いられなくなったモンゴル文字を現在まで使用しており、伝統文化との強いつながりを維持している。モンゴル国あるいはロシア領内のモンゴル人との関係は長い間閉ざされてきたが、旧ソ連の崩壊、モンゴル国の民主化、中国の政策の転換によって経済・文化交流は再開されている。

(内田敦之)

ハルハ、漢族

◎L. Jamsran, U. Erdenebayar & N. Altantsetseg, *Kyatad dakhii Mongolchuud*. Ulaanbaatar, 1996. / 田中克彦『草原の革命家たち』中央公論社, 1990.

## 監修者

綾部恒雄(あやべ・つねお)

国連教育科学文化機構(ユネスコ)企画専門員、九州大学教授、筑波大学教授、京都文教大学副学長などを経て、現在、城西国際大学招聘教授、筑波大学名誉教授。文学博士。

## 編集委員

綾部恒雄

大塚和夫(おおつか・かずお) 東京都立大学助教授

木村秀雄(きむら・ひでお) 東京大学教授

黒田悦子(くろだ・えつこ) 国立民族学博物館教授

小西正捷(こにし・まさとし) 立教大学教授

小松久男(こまつ・ひさお) 東京大学教授

須藤健一(すどう・けんいち) 神戸大学教授

谷 泰(たに・ゆたか) 大谷大学教授、京都大学名誉教授

日野舜也(ひの・しゅんや) 京都文教大学教授、東京外国語大学名誉教授

横山廣子(よこやま・ひろこ) 国立民族学博物館助教授

## 世界民族事典

平成12年7月15日 初版1刷発行

監修者 綾部 恒雄

発行者 鯉 渕 年 祐

発行所 株式会社 弘文堂 101-0062 東京都千代田区神田駿河台1の7  
TEL 03(3294)4801 振替 00120-6-53909  
<http://www.koubundou.co.jp>

印刷 図書印刷株式会社

製本 牧製本印刷株式会社

© 2000 Printed in Japan

Ⓔ 本書の全部または一部を無断で複製複製(コピー)することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。本書からの複製を希望される場合は、日本複製権センター(03-3401-2382)にご連絡ください。

ISBN4-335-56096-6